

平成24年度 学校総合体育大会 サッカーの部を振り返って

中体連サッカー専門部技術部長
さいたま市立慈恩寺中学校 小松 工

7月17日に開幕した埼玉県学校総合体育大会も無事7月30日に決勝戦をむかえ、爆発的な攻撃力を誇る鴻巣市立吹上中学校がPK戦の末勝利し、初優勝で幕を閉じた。三度目の挑戦（昨年度の学総、新人はいずれも県決めの試合で惜敗）で勝ち取った栄光であり、吹上中のタイトルとなると鈴木慎吾選手（現東京V所属）を擁し高円宮杯の関東大会へ駒を進めた平成4年度、実に20年前までに遡る。準優勝のさいたま市立木崎中学校は9年ぶりの覇者奪回には至らなかったが粘り強い戦い方で7年振り3回目の関東大会出場を決めた。8月7日から開幕した関東大会では両チームとも惜敗し（吹上は第7代表決定戦・木崎中は1回戦）、全国大会への切符を手にする事ができなかったが最後まで闘い抜いた選手たちの健闘を讃えたい。

県大会は11試合のスカウティングであったが、気になった点を簡単にまとめてみたい。

1つ目は縦パスの精度が低く、攻撃のスイッチがなかなか入らなかったこととともに、正確に縦パスが入っても周りの選手の関わり方が適切ではなく個を生かすのではなく、個に頼りきったサッカーになる場面が多いと感じた。パスの質やサポートの質と合わせてゲームの流れを読む力を向上させる為にも、常に観ておく（ボール・味方・相手・スペース・ゴール）ことが必要である。また、ボランチの選手に多く見られたが、フリーでパスを受けても1stコントロールで前を向く技術が不足しているように感じた。無駄なタッチ（タッチ数を多くする→自分のリズムを作る≠チームのリズム）をせずに前を向くことや次のプレーにすぐ移る為のボールの置く位置にこだわりをもってほしいと思う。

2つ目はDFの攻撃参加である。以前に比べれば少しは多く見られるようになったが、自分が相手からボールを奪った勢いで攻め上がるパターンが多い。もっとゲームの展開・流れを読んだ（ボールの動きに合わせた）意図的な攻撃参加に発展して行ってほしいと思う。

3つ目はGKの試合への関わり方が不十分であると感じた。FP10人+GKというチームが未だ多く、1/11になっていない。高いスタートポジションをとっていれば余裕を持ってプレー・ボールを処理できるのに、リスクマネジメントや広い守備範囲という視点で見てもスタートポジションが低すぎる。結果、慌てて前に出て余裕のないプレーとなり、残念ながらさほど危険な場面でもないのに、ほとんどの選手が下げられたボールをただ前に蹴り込んで相手にボールを与えている印象を受けた。また、もっと攻撃時（ビルドアップ）に積極的にゲームに関わってほしい。ミスを恐れてかDFラインが苦しい状況でも自らボールを受けようとしなくて味方がボールを簡単に外に切ってしまう（相手にボールを与える）所も気になった。GKが意図的にボールを受け、最終ラインでGKを含めた+1の状況でボールを動かせるようになれば、DFの一人は少なくとも1つ前にポジショニングをとることができるし、ボールを失う場面も減る。その事で攻撃の幅も広がる事を理解してプレーしてほしいと思った。

チームとしては、お互いの距離感を意識し、連動してボールを奪っていた戸塚中や、個々がボールを失わないことと奪うことを一番理解し表現していた埼玉栄中。絶対的エース茂木⑩にボールが入るとテンポよく周りが次々とアクションを起こし推進力に秀でていた吹上中が印象的であった。

全国中学校サッカー大会は青森山田中の初優勝で幕を閉じたが冒頭にも述べたように、出場チームに埼玉県代表の名はなかった。これは43回を数える歴史の中で初めてのことであり、私はこの悔しさを絶対に忘れない。今年は機会にも恵まれ、各都県の準決勝・決勝戦6試合、関東大会7試合、全国大会6試合もスカウティングした。ほとんどのチームが最終ラインを相手選手よりも1枚多く余らせるセオリー通りの戦い方をしているし、2枚残してノーリスクで戦っているチームもある。攻撃側としては相手選手が+1や2でも崩せる圧倒的な個の力（攻撃力）があれば素晴らしいであろう。でも、その状況で打開できなかつた場合はどうするのか？答えは簡単で攻撃（前線）に人数をかけるしかないのだが、ほとんどのチームがセオリーを崩そうとしない。では、なぜできないのか？これも答えは簡単で最終ラインが数的同数でボールを奪うことができない、ゴールを守ることができないからであり、それは選手・指導者共に自信のなさの現れとも言える。これはとても残念なことに埼玉も例外ではない。いざ勝負という時の為にも、より攻撃的なサッカーを展開する為にも、ぜひ数的同数の状況でボールを奪える闘える選手に育ててほしいと思う。合わせて個の育成・レベルアップをもっと重視し、個が弱いから組織

で戦うという考え方は撤廃し、より強い個を育て組織を高めていくという考え方が浸透してほしい。

話は変わるが新シーズンとなり、おそらく今月末から来月中旬にかけて各地区新人戦が始まるだろう。その際、心に留めておいてほしいことは、その場凌ぎで建てた家は必ず亀裂が生じ崩壊することである。指導者は、1年後の学総にどのようなチームになっていたかの明確な見通しをきちんと持ち、その通過点に新人戦があるという考えで臨んでほしいと思う。目先の勝利に踊らされそれを見失わないでほしいし、勝つことを大人のモチベーションにしないでほしい。今の段階でどのようなチームづくりの最中なのか伝わるようなサッカーをしてほしい。そうすれば、どのチームも新人戦の戦い方が変わってくるはずだし、1年後の学総の大会の質も上がるはずだ。**我々は選手の未来に触れている**。我々は教員であるとともにこの年代の、育成年代の指導者としてのプロでなくてはならない。その事を私自身も含めた全指導者にもっと強く自覚してもらいたい。

そして、選手のプレーの質を向上させるには指導者の資質・観る目の向上が不可欠である。その方法として多くの試合を観る事も1つ挙げられるが、自チーム以外の選手を指導する事と他の指導者に自分の練習・指導法を見てもらう事が何より大切だと思う。その為にはトレセン活動に積極的に携わってほしいし、サッカーの基礎基本を再確認する意味も含めJFA公認指導者ライセンスを取得してほしいと思う。H23年度中体連サッカー専門部の調査ではS～C級の保持率は約15%でしかない。別にライセンスを保持しているから良い、保持していないから悪いと言っているのではない。保持することで満足するのでもなく積極的に講習会等にも参加し、他の種別や他県の指導者と関わり（指導実践など）を通していろいろ感じ、吸収して行ってほしいと思う。ある意味全国大会を逃した今が分岐点・再出発点であり、ここから埼玉が変わっていく姿を技術部長の立場から期待したい。

最後になりますが校務多忙の中、陰で大会を支えていただいた西部地区と南部地区を中心とした中体連サッカー専門部の役員と関係者の方々や全力でプレーする選手に温かい声援や拍手を送っていただいた保護者や地域の方々に心からお礼申し上げます。